



# 2011年度 留学生日本語教育センター年報 *JLC ANNUAL REPORT 2011*

No.19 JULY 2012

Japanese Language Center for International Students

## アートを通した過去と未来の間

**エリカ・カミニシ  
(ブラジル)**

2005年度 研究留学生



私が大学院で視覚芸術の勉強をするために日本に着いたのは、ちょうど7年前で、26歳の誕生日だったこともあり、その日のことは、今でもはっきり記憶に残っている。日本への旅は、夢と希望と興奮に満ちた贈り物だった。しかし、新しい国に来た者が誰でも抱くような、留学の機会を得たうれしさと家や家族や友達と離れる深い寂しさが混ざった気分だった。

新しく友人ができ大学生活で忙しくなると、私の不安はどこかに行ってしまった。日本で最初に暖かく迎えてくれたのは外大だった。先生方の支援は私が適応して成長するのにとても重要で、先生方が自分の子供のように私達を見てくれたのを今でも覚えている。本には書かれていらないような日本文化の様々な特色を説明し、生きた歴史を学べるようにあちこちに連れて行ってくれたものだ。

外大で日本語と日本文化に深く触れたことで、後の勉強の礎となっただけではなく、自己と自分がどこから来たのかについても理解を深めることができた。私は自分が日系であるということをより意識し始め、また、日系ブラジル人家庭の常で両親が説明することはなかったものの、我が家では日本の習慣やしきたりを常にしていたことに気がついた。日系3世・4世になると、日本の文化や伝統の知識は、祖父母や両親が家庭で教えることに限られるものだ。

勉強が進むと、私はより日本の文化・芸術に関するすべてを知りたくなった。来日後の数年は、受入大学の日本大学で関連する授業に出るだけでなく、東京の国立博物館や美術館などを毎週訪れて講演を聴くなど、この世界にどっぷりと浸かった。こうして、この時期は、私の人生、そして、私が芸術を見る眼や作品を生み出す方法を大きく変えた時期であった。

私が日本に留学したのは、映像芸術（メディアアート）のデジタル技術を、その分野でよく知られた国で学びたかった

からであったが、人生は予測できないもので、当初の目的とは反対の極にある、古く伝統的な日本に浸ることとなった。

この時期、私は日本画とその象徴するものを勉強し始め、少しずつ作品に日本の古地図の要素とコラージュを取り入れるようになった。この全く新しい創造のプロセスは、かつて両親が祖父母の郷愁の国について語ったものを、詩的に形を変えて語ることであった。

この新たなアプローチを通して、視覚芸術の芸術家としてのキャリアに新しい方向性を与えてくれた堅実で成熟した作品を作り上げができるようになった。そして、2009年には日本大学大学院芸術学研究科博士前期課程の最優秀作品賞、2010年にはブラジル芸術財団のナルテ現代美術賞など、様々な賞を受賞した。私の作品は、日本とブラジルで広く紹介され、過去から現在歩んできた道を辿りながら、我が家に今も残る古き日本の思い出が失われないようにしながら本当に愛するものに変えていっているのである。

エリカ・カミニシ。1979年生まれ。2005年度国費研究留学生。現在、フランス在住。

2005年から2010年まで約6年間日本に居住。2009年、日本大学大学院芸術学研究科より映像芸術の修士号を授与される。主な展示会は、横浜市民ギャラリー、あいちトリエンナーレ2010、越後妻有アートトリエンナーレ2012。2011年、東京オペラシティギャラリーprojectNで初の個展を開いた。

ホームページ：[www.ericakaminishi.com](http://www.ericakaminishi.com)